

2 排尿障害を有する患者の血の道症に 対して加味逍遙散で治療した経験

グッドライフ病院 泌尿器科
松本 裕子、福井 彩子

香川大学加藤先生らのstudy「漢方診療に関する多施設アンケート」で、泌尿器科医が漢方を処方する機会は増えているが、8割は診断病名に基づき処方しており、漢方薬の処方を検討する泌尿器科疾患は過活動性膀胱、夜間頻尿、前立腺肥大症の順番に多かったとの報告があった。

同報告で泌尿器科医が汎用する処方では猪苓湯、牛車腎気丸、八味地黄丸、大建中湯、葛根湯、芍薬甘草湯が挙げられた。

加味逍遙散は生薬構成に芍薬、甘草を含む方剤であり、柴胡枳実芍薬甘草からなる四逆散類として認識される。婦人科領域、更年期障害などでよく知られた漢方薬であるが、背景に精神神経緊張（肝鬱）や血の巡りの悪さを伴うものであれば尿路症状にも無論効果が高く、尿路を治療しているうちに気づけば人柄が穏やかになっていることによく気づく。

今回は、柴胡、当帰、芍薬を中心とした配合薬である加味逍遙散の薬能を中心に、尿路症状に有効であった症例を呈示したい。